祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報　第87号

てんまてんじん

大阪天満宮
1125
菅原道真公
御神退1125年
式年大祭

御迎え人形「真田幸村」（大阪府指定有形民俗文化財）
令和６年７月　花外楼ロビーでの展示風景

文庫蔵の解体……3頁
千代崎行宮の御造替……4頁
熱田神宮宝物館へ出品……5頁
天神祭を詠んだ長歌……6頁
境外の天満宮・天神祭（七）
　綿業会館『蠟染 天満祭ノ図』…10頁
宮司、大阪府神社庁庁長に就任…12頁

表紙解説
御迎え人形シリーズ②
真田幸村／佐々木高綱

昨年本誌85号からはじまりました当宮「御迎え人形」紹介シリーズ、今回は「真田幸村／佐々木高綱」に、少々の新情報を交えてお届けします。

●〈胸につけてるマークは「雁金（かりがね）」

佐々木高綱 実は 真田幸村 から
真田幸村 もとは 佐々木高綱 へ

ことのはじまりは、昨年（令和六年）七月、筆者が当宮に正式にかかわってはじめての天神祭、毎年恒例の近隣各所での「御迎え人形」展示。北浜の花外楼さんには「真田幸村」、その組立て作業で人形胴体、衣裳や木箱に実際に触れたことでした。

それ以前から気になっていたのは、胸につけてるマーク（＝家紋）が、常に参照される『御迎船人形図会』（弘化三年）のそれとは異なること。その違いの訳も胴体や木箱墨書から、およそ推測されることとなりました。

ともかく結論から申し上げますと、この人形は明治三十五年（一九〇二）に、「真田幸村」になったと言えます。

急いでつけくわえますが、当初は、佐々木高綱実は真田幸村でした。ですので先に示したごとく、「佐々木高綱 実は 真田幸村」から「真田幸村 もとは 佐々木高綱」へとあえて申し上げたいのですが、以下そのあらましを、紙幅の都合で要点のみ紹介いたします。

●御迎え人形・佐々木高綱のこれまで

御迎え人形は天神祭の船渡御で、御旅所近辺から神輿を迎えに出た船に飾られた人形で、正遷宮等に際し天満宮近辺に飾られたことも周知のとおりです。これまで高島幸次当宮文化研究所所長の先駆的独創的論考によって人形浄瑠璃・歌舞伎の登場人物に取材、緋色の衣裳に疱瘡除けの意が籠るなどの見解が示されました。

「佐々木高綱」は浄瑠璃（近江源氏先陣館、鎌倉三代記）の設定から当時幕府に憚れた「真田幸村」なのは暗黙で、それは衣裳に「永楽通宝」を仕込んで真田の家紋「六文銭」を「におわせる」。後には憚りはなく「真田幸村」として飾るとされます。

●衣裳改変と胴体・木箱の墨書

佐々木の「四ツ目結」から真田の替紋とほぼ同型の「雁金」へ、改変の手掛かりは胴体の墨書（左写真）。

明治三拾五年／菅公一千年祭
衣裳萬般／大修覆ス

またこの他、首（かしら）（人形頭部）用の木箱には所有来歴等の長文の記載があり、「修覆」に関する箇所には、

明治卅五年天満宮菅公一千年祭
執行ニ際シ町内有志相謀リ
大修覆ヲ加タリ…

さらに胴体側面には（左写真）

御迎人形真田幸村胴
舊胴腐蝕セシニヨリ
大正拾壱年八月中旬
（紀元二千五百八十二年）新調之

これらの記載から明治三十五年の衣裳修復で、おそらく胸のマークも改変、もとの佐々木高綱でありつつ、名実ともに真田幸村になったと推察、大正にも修復を重ね今に至る。いやその後も、実はその前も（管見では、この人形初登場は文政四年。その図会や浮世絵に描かれる姿の違いなど、高綱／幸村に限らず御迎え人形にまつわる）様々な要検討事項これあり。いずれ改めて、御物語り仕ります。

（文化研究所 鈴木幸人）

千百二十五年式年大祭にむけて
文庫蔵の解体

昨年十一月中旬、本殿北側にあった文庫蔵（木造、約三十㎡、約六ｍ高）を解体しましたので、その経緯についてご報告いたします。

◆第一文庫と第二文庫

この文庫蔵は、天保八年（一八三七）の大塩平八郎の乱によって、従来の文庫蔵が焼失した後の天保十一年に再建されたものでした。

その後、大正十年（一九二一）には境内西北隅（文華館北隣）に第二文庫蔵（木造、約六十二㎡、約七ｍ高）が新築され、従前の文庫蔵は第一文庫と呼ばれるようになります。

翌十一年には、第二文庫蔵の完成を待っていたかのように、明治・大正期の代表的な漢学者・近藤南洲（元粋）の著書や蔵書二万余巻が奉納されたので、それを収めて『天満宮第二文庫　南洲近藤先生遺書』の扁額を掲げました（のちに扁額だけ第一文庫蔵に移したので、第一と第二の呼称が入れ替わりました）。

◆文庫蔵の解体

解体した文庫蔵には、近年は当宮所蔵の屏風や御神酒講の猩々人形、天神祭で使用する提灯などを納めていたのですが、昨年八月初旬に、天災と老朽化により西面の軒屋根が崩落してしまいました。

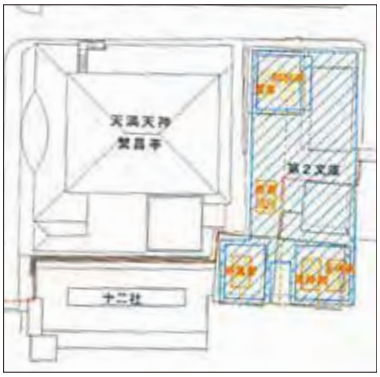
そこで、修繕が検討されたのですが、千百二十五年式年大祭の主要事業でもある「神具収蔵庫（仮称）」の建設予定地にあたるため、この機会に基壇の石垣を残し取り壊しました。

◆神具収蔵庫（仮称）の建設予定地

「神具収蔵庫（仮称）」は、この文庫蔵跡と、その南側に建つ神輿蔵（木造、約五十六㎡、約七ｍ高）・御鳳輦庫（木造、約四十㎡、約七ｍ高）の敷地を合わせた地に建設の予定です。実は、神輿蔵・御鳳輦庫も、令和元年にシロアリの被害に遭い躯体が傾きましたので、全体重量を減らすため南側にあった向拝屋根を取り壊し、構造を安定させ利用している状態なので、やがて解体の予定です。

文庫蔵・神輿蔵・御鳳輦庫ともに百年を超える貴重な蔵ではありますが、修繕したとしても実用にそぐわない部分が多く、式年大祭を機に、実用性を備えた建築物に役目を譲ることになります。

（造営課 中西佑）



第二文庫（西面）崩落した軒

第二文庫（正面）

菅原道真公御神退
千百二十五年式年大祭趣意書

令和九年（二〇二七年）は延喜三年に菅原道真公（天神さま）がお亡くなりになられて千百二十五年に当たります。

天神さまは誠の神、書道・詩文の神、そして学問の神として全国津々浦々約一万二千社の神社にお鎮まりになっておられ、二十五日を御縁日としていて、当宮では天神祭をはじめ多くの神事を二十五日に執り行っています。又、二十五年毎に式年大祭を斎行しており、これまで様々な記念事業を行って参りました。

当大阪天満宮では節目である千百二十五年大祭に向けて御神徳を偲び御神慮をお慰め申し上げると共に益々の御威徳の発揚を祈念致しまして奉賛会を結成し、記念事業として本殿の御修復をはじめ、境内の設備事業などを行い千百二十五年式年大祭を斎行致します。

大阪天満宮 宮司　寺井種治

「千代崎行宮」御造替完了

このたび当宮の御旅所「千代崎行宮」（西区千代崎二丁目）の御造替工事が無事に終わりましたことをご報告いたします。

工事は一昨年十月から始まり、昨年三月に地鎮祭を、九月には上棟祭を斎行し、十一月末には外構の石玉垣も設置され、建設工事は予定通りに施工されました。

遷座祭　そして十二月七日の吉日浄闇を卜占して、本宮から御分霊の遷座祭が宮司以下神職、千代崎行宮奉賛会会長以下役員も祭儀に参加して斎行されました。

その前日には大清、臨時の大祓式、御飾、習礼が行われ、地元の皆様と神職が共にご準備を奉仕しました。当日は冬らしい冷え込みとなりましたが、快晴に恵まれ午後から北区の本宮において、宮司が奉仕して御分霊移御の儀がはじまり、御神霊は御料車で西区の千代崎会館へお遷しされて、同会館の仮御座に奉安されました。

日没になって遷座之儀が開始され、行宮前庭の参列員と千代崎行宮会館の祭儀奉仕員の二ヶ所での修祓が行われました。奉安所内では御列の召し立てが行われ、供奉員として千代崎行宮奉賛会の島田会長、前行所役として松野連合会長、以下諸員が御列について出御の時を待ちました。

定刻になると館内、行宮社殿の燈火が滅せられ、宮司の奉戴する御分霊が絹垣に包まれて楽人が雅楽を奏する中、約二百メートル先の新行宮へ奉遷されました。

御神霊が無事に新殿に入御した後に神饌が供され、宮司は祝詞を奏上して、遷座の由を奉告申し上げました。続いて神楽が奏せられ、本宮からの参列者、奉賛会役員関係者が拝礼して無事に遷座祭は斎行されました。

竣功奉告祭　年が明けると、新行宮としては初めての新年を迎え、例年にない多くの参拝者で賑わっておりました。

諸々のことも取り納めて長年に亘る御造替事業も、梅の花が見頃となる二月十六日に、関係者が大阪天満宮に参集して竣功奉告祭が斎行され、直会祝宴を以て本事業は完了となりました。

この日まで永きにわたりご尽力ご奉仕賜りました皆様に、心からの御礼を申し上げ謹んでご報告申し上げます。

本殿

全景

遷座祭

遷座祭御列

熱田神宮宝物館での当宮所蔵宝物の貸出・展観

●熱田神宮「吉兆の神獣～神話から現代まで～」展

当宮所蔵の宝物（掛軸や屏風絵）が本年（令和七年）のお正月、一月一日から二十八日まで、熱田神宮宝物館（名古屋市熱田区神宮、写真①）での新春特別展「吉兆の神獣～神話から現代まで～」に貸出、展観されました。

この展覧会は、図録の文章によれば、各地の神社や信仰と結びつきの深い動物（＝神獣）に注目し、古来私たち人間はその特別な能力―目に見えぬ神、物言わぬ自然に対峙する霊力をもつ動物の姿や鳴声から神々の意志を感じ取ったのではないか、神獣にかかわる宝物の展観をとおして各々のご祭神の神徳を広めたいと企画されたと述べられています。

写真①

同展では、そうした神獣を「うま、とり、さる、いぬ／しし、うさぎ、ねこ、うし、しか、かめ、とら、りゅう」と章分けして展観されましたが、当宮からは、菅公、天神さまに所縁の深い「うし（牛・丑）」の章に、所蔵宝物、通常は大阪市立美術館や大阪歴史博物館に寄託保管される、大阪府、大阪市指定文化財を含む次の五点を出陳しました。写真②は会場風景です。

「騎牛天神像」　歌川芳虎
「旭日白牛図」　高谷篁圃
「牧牛吹笛童子図」　中島華鳳
「水墨臥牛図」　田能村小斎
「春秋遊牛図屏風」　大岡春卜

写真②

●宝物貸出業務に関わって

当宮では所蔵宝物を他の神社で展示するのはこれまで稀だったとのことで、貸出展示に関わる手続きや作業、それには寄託館や文化財保護課との連絡調整（指定文化財のため）から、宝物の状態確認、輸送のための搬出入の作業等々があるのですが、今回当宮の神職としてこの一連の業務に携わるはじめての機会となりました。あたり前ながら、丁寧さと的確さが求められるのはもちろん、当宮の宝物・文化財に向き合うこと、これからの活用についても学ぶきっかけとなりました。

また実際に同展の見学にも伺いましたが、正月期間だったこともあり、幅広い年代の方が来館されて、熱心に鑑賞されている様が覗えました。前述のように、多様な神獣を神社の由緒やご祭神との関わりから紐解くのは興味深く、多くの神社の宝物を見ることができ、神社ごとの特色も感じました。当宮ご祭神たる菅原道真公と牛との関係など、神職として当たり前と思っていたことが、一般の方々には必ずしもご存じないことも多いと知ることになり、今後の当宮での宝物の展示やそれをとおしての普及等についても考える機会をいただきました。

●当宮「梅まつり」でも展観

なお、上記宝物（掛軸、屏風絵）は、熱田神宮から返納の後、折角の機会ととらえて恒例の「梅まつり」会場でも展示されました。

写真③

例年好評の刀剣の展示にくわえて、道真公に所縁の梅と牛とのコラボレーションは、参拝者ご来場の方々の注目を集めていました（写真③）。

●宝物展観からつなぐ信仰

これから当宮は菅原道真公御神退千百二十五年の節目を迎えます。それを機に宝物・文化財を後世に伝えるための収蔵庫建設も計画されています。学問の神様として親しまれる天満宮ならではの宝物との向き合い方、知識と感性両面での学びや気づき、そして信仰につながるあり方を、私達も探り学びたいと思っております。

（出仕　柴田沙南）

＊写真①、②は熱田神宮・熱田神宮宝物館からご提供いただきました。

天神祭を詠んだ長歌
曳き交う地車、川面を埋める船

●歌集『浦のしほ貝』

当宮の御文庫には、幕末の万延元年（一八六〇）に心斎橋安土町の出版社・河内屋和助が奉納した歌集『浦のしほ貝』が収蔵されています。

この歌集は、江戸後期の代表的歌人・熊谷直好が詠んだ和歌一五八二首を全三冊に収録し、弘化二年（一八四五）に刊行されたものです。

同書には、天神祭を詠んだ長歌が載っていますのでご紹介しましょう。長歌とは、短歌が五七五七七調であるのに対し、五七調を繰り返し七七で終わる和歌のことです。

『浦のしほ貝』（全三巻）
表記は、上巻「浦農志保貝」、中巻「浦の塩かひ」、下巻「宇ら乃しほ貝」と意図的に変えています。これも日本の文化です。

●天神祭の長歌

まずは、その長歌を原文のまま引用しますが、難解なので、そのあとに注釈と意訳を付しておきます。

天満祭のさまを詠む長うた

国毎に 国津社あり 里ごとに さと祭
あれど 津の国の なには壮士が あら
かねの 土もくぼめと ふみとよみ
車引きかへば 玉ぼこの 道ゆき人は
行きかねて 立ただよひぬ 大川に
集へる船は うけすゑん 水さへなく
てたきあぐる かがりのかげに 大ぞ
らの 雲もこがれぬ 抑は いかなる神
ぞ かしこきや 我すがはらの 菅の根
の ひと本たちて なる道の なりの極
みと 天のした まをし給ひて 天の原
満ちたる光 千世までに かくぞかが
やく あふがざらめや

●地車と船と篝火と

右の「国津社」とは、「天津神」に対する「国津神」を祀った神社を言います。「津の国」は摂津国、「なには壮士」は「浪速男子」のことです。「あらかね」は土の枕詞。「ふみどよみ」は「踏み響かせ」、「車引きかえば」は「車を曳き交えば」の意。原文では、「車」に「此句ダンジリヲ云」と注記しています。「玉ぼこ」は道の枕詞。「うけすゑん」は「浮かべて」、「たきあぐる」は篝火を「焚きあげる」、「千世」は「千代」と同意。では、ここまでを意訳しましょう。

国ごとに神社があり、里ごとに里の祭があるが、摂津の祭では、浪速男子が土を窪ますほどに踏み響かせて、地車を曳き交わし、道行く人は進みかねて立ち止まり、たじろんでいる。大川には無数の船が浮かんで川面を埋め尽くし、篝火の炎は、大空の雲を焦がさんばかりに焚きあげられている。

●天の原に満ちたる光

後段の注釈を続けます。「かしこき」は「畏き」、「菅の根の」は、本来は「長・乱る」の枕詞ですが、ここは菅原に掛けています。「なりの極み」は「功成り名遂げる」でしょうか。「天（あめ）の下まをし給ひて」は、「天の下申し給う（天皇に代わって執政する）」の意です。「天（あま）の原 満ちたる光」は、言うまでもなく「天満」に響かせています。以下に意訳します。

そもそも、どのような神なのだろうか。畏れ多くも我が菅原氏の内から一人異例の出世をされ、功成り名遂げて執政され、その御威光は天に満ち、幾千年も輝き続ける。鑽仰しないではおれない神である。

作者の熊谷直好（一七八二～一八六二）は、周防岩国藩（山口県）の藩士でしたが、脱藩後の文政十年（一八二七）に大坂に移り住んで、歌道に専念しました。

この長歌が何年の天神祭を詠んだものかは不明ですが、勇壮な地車の曳き廻しや、夥しい船の数に、改めて天満天神の御威徳が身に沁みたようです。（文化研究所　高島幸次）

天満天神研究会（天天研）の報告

令和九年（二〇二七）「菅原道真公御神退千百二十五年式年大祭」を見すえて、天満天神研究会（略称「天天研」）を継続的に開催しております。多様な専門分野の研究者等が集い、天神信仰の諸相、とくに当宮の文化や歴史にかかわるこれまでの研究を洗い直し、改めて成果公開をめざす試みです。

このところ開催いたしました第五回、第六回研究会について、それぞれの報告者と報告題目、参加者を記しておきます。（開催場所は各回とも当宮文華館3階。文中敬称を略します。）

●第五回　天満天神研究会

令和六年十二月二十一日

①林　潤平（京都市学校歴史博物館学芸員）
「教育史研究における菅原道真像
—とくに近代以降を考察した研究を主な対象として—」

②横山恵理（大阪工業大学准教授）
「『源氏物語』と天神信仰—基礎資料の提示と今後の研究課題—」

●第六回　天満天神研究会

令和七年三月二十九日

①長谷川貴信（京都府文化財保護課美術工芸・民俗・無形文化財係）
「渡唐天神と林和靖—長谷川等伯隣華院障壁画を起点に—」

②藤立紘輝（九州大学大学院人文科学府博士課程／現太宰府天満宮文化研究所嘱託研究員）
「中世太宰府天満宮における神幸式大祭の基礎的考察」

第五回から高島幸次所長の意向もあり各回二名の報告としましたが、報告者、題目いずれも多岐にわたり、経験見識を活かして天神信仰の問題に切り込んでいただきました。今後も、天神様の結ぶご縁を大切に取り組みますのでご支援お願いします。

＊第五回、第六回出席者（敬称略・順不同）は、上記報告者にくわえて、竹居明男、北山円正、松浦清、永原順子、西山由理花、溝邊悠介、竹嶋康平、佐藤優、町田大悟、工藤裕司、南坊城光興、高島幸次、鈴木幸人（文化研究所 鈴木幸人）

浪速菅廟吟社詠草

深翠　浦田佳彰撰

二月席題　村巷探梅

盡誠堂　麓　直浩　岡山県

群雀三竿集短垣　雖春風冷雪猶存
微香疑是花開否　漫歩探梅河畔村

《訓読》群雀三竿短垣に集ふ、春と雖も風冷たく雪猶お存す、微香　疑ふらくは是れ花開くや否やと、漫歩して梅を探る河畔の村。

《通釈》群雀は日が高くなってから、まだ成長していない垣根に集まってきた。春となったものの雪の白色はまだ残っている。少し香りがするが、これは花が咲いたためだろうか。梅を探しそぞろに歩く河畔の村。

○春ながら雪なほ残る村の辺に梅が香なるやしばし探らん

三月課題　早春小旅

紅秀　林　由紀枝　尼崎市

梅花的皪入春風　興促清游西又東
勝境山渓香世界　帰途迷処一橋通

《訓読》梅花的皪として春風に入る、興は清游を促し西又た東、勝境山渓香世界、帰途迷う処一橋通ず。

《通釈》梅花は白く輝き春風にさらわれていく。詩興とともに風流を求めて遊ぶこと、西へまた東へ。勝境山渓は香りに満ちた世界である。帰り道、迷う処に一本の橋がある。

三月席題　山麓聞鶯

深翠　浦田　佳彰　桜井市

柴菴無有客来回　地勢山余春信魁
最愛青鶯両三囀　宜詩蓋是隠生財

《訓読》柴庵有る無し客の来回、地勢は山の余りにして春信は魁なり、最も愛しむ青鶯の両三囀、詩に宜し蓋ぞ是れ隠生の財ならずや

《通釈》柴を葺いた粗末な庵に来る客はいない。この地は山の端であり春の訪れは最も早い。鶯の囀りが二三聞こえてくるのが最も愛おしく、詩とするのに適している。これは紛れもなく隠者の財産とすべき物ではないか。

○山の端に先駆け来る鶯を聞きて詠みけり世捨ての財

四月課題　春郊眺望

不孤　松村　暁二　八尾市

東郊一望杏花村　處處鶯声聞邸門
停杖暫慰衰老耳　風呼暖氣杳乾坤

《訓読》東郊一望す杏花の村、処処の鶯声邸門に聞こゆ、杖を停めて暫し慰む衰老の耳、風は暖気を呼びて乾坤杳なり。

《通釈》春の野に遊び、杏花の咲く村落を一望する。あちこちに啼く鶯の声はあの邸宅へ聞こえているだろう。杖を停め、この老いた耳を傾けて慰めよう。風は春の暖気を遠くから運んできて天地をめぐる。

社務所　電話番だより
よくあるお問い合わせ
『賀の祝い』

我が国には、人生の節目を一定の年齢で区切る様々な儀礼が伝えられています。「七五三詣」「十三参り」や、「厄年」「賀の祝い」などです。

「厄年」は、数え年で男性二十五歳・四十二歳・六十一歳、女性十九歳・三十三歳・三十七歳、六十一歳をいい、この年には厄払いのお参りをする習慣です。

しかし、最後の六十一歳（満年齢六十歳）については、「厄年」であると同時に、「還暦」として祝賀の対象にもなっています。

この六十歳「還暦」に続いて、七十歳「古稀」、七十七歳「喜寿」、八十歳「傘寿」、八十八歳「米寿」、九十九歳「白寿」、百歳「百寿（紀寿）」には長寿をお祝いしますが、これを「賀の祝い」、あるいは「賀寿」といいます。

一般に行われている「賀の祝い」は「還暦」からですが、もっとたくさんの区切りがあったことは知られていないようです。

古代には、十歳を「幼学」、十五歳を「志学」として祝い、また、四十歳から十年ごとに長寿を祝う習慣もありました。古い時代には、四十歳からが長寿の始まりという感覚だったのでしょう。高齢化が加速している現代には意外な感じがしますが。

そういえば、先の「古希」「米寿」などの祝いも、中世になってから新しく加わった儀礼だといいますし、「還暦」の祝いも、さらに後の近世になってから一般化されるのだそうです。

そういえば、むかしの童謡『船頭さん』では、「村の渡しの船頭さんは、今年六十のお爺さん」と唄っていましたね。しかし、現代では、六十歳の定年退職制度も見直されており、「古来稀なり」といわれた「古稀」も、現役世代になりつつあります。

また、世界一の平均余命（令和五年に八十四・三歳）を誇る我が国では、百歳を超える長寿も珍しくはなくなり、新しい「賀の祝い」として、百二十歳を「大還暦」と呼ぶ言葉も生まれています（実例はお一人だけだそうですが）。

ともあれ健康で長寿であることこそが大事であって、その事に感謝するとともに「賀の祝い」を祝することは、世界共通の願いではないでしょうか。

大阪天満宮献詠　風月社
令和六年十月～令和七年三月

令和六年

十月兼題　柿

茜さす入陽と色をともともに
すゝなりの柿里は閑けむ
佐野　秀子

天高し山の辺の道訪ひたれば
たわわに実る柿色づきぬ
大北　滋保

十一月兼題　霜

目覚ましに霜の降りたる庭に出て
冬のにほひを深く吸いこむ
南口一二美

十二月兼題　忍耐

耐え忍ぶこともあらねど歳暮るる
寺の鐘の音ただに寂しく
鈴木　敬子

耐へ忍ぶ長き時あり空たかく
竜舌蘭の金色の花
乾　恵子

令和七年

一月兼題　鏡

新しき年を迎へて気に入りし
和服選びて鏡に写す
家治　綾子

初参り年玉を手に幼児が
鏡にむかひ紅をさしおり
忠津　清治

美しきもの美しく醜きも
映す鏡の神にひとしく
松村　暁二

二月兼題　梅

天満の宮に咲き染む梅のはな
我を呼ぶがに香り漂ふ
伊藤　涼子

こちかぜの吹きて国里匂ふらむ
我がやどの梅少しふくらぶ
坂井田礼子

三月兼題　桃

暮れ初むる厨にじっと位置しむる
ひとつの桃の放つ芳香
北岡由紀子

野の景色暖かさまし桃の花
きれいな色に癒されている
中瀬　央子

天満の天神さんと私（8）

奉納品の前掛け

出路　正美

裁縫が得意でもない私が、昨年夏より神様の前掛けを作り始め、そろそろ三百組になりそうな節分の際にもお納めさせて頂く為に朝一番にお届けに上がったものの、節分祭で社務所もバタバタされていて、「十時過ぎなら」という事で、こんな日に来てしまった後悔や、二時間以上を待つか出直すか日を改めるか、頭の中でグルグルしながら白米様の前で棒立ち。

少し歩いてみようと、境内の吉備社・八幡社・松尾社に向かうと前で行列整備の為にコーンを並べて作業されている権禰宜様。ちょっとお声がけをさせて頂いたところ手を止め対応下さり、奉納品の前掛けをお受け頂けて、神様のお計らいに感謝。

天神様は学問、至誠、厄除けで有名ですが、日本の神様の素晴らしいところは、あらゆる事に手厚く、商売繁盛・無病息災・家内安全は代表的であり、縁結びや子宝、方除け、祈雨など最近では時代でしょうか、薄毛の悩みまで聞いてくださるところもあるとか。日本版の揺り籠から墓場まで。今で言うところの神様のホスピタリティ、素晴らしさは日本の誇り、私は自慢です。

天神様は一人で来ても家族でも、ゆったり過ごせるスペースが好きで、梅は勿論の事、他にも出店が出たり季節の催し物があったり、ショーや猿回し。女性と可愛いお猿さんのペアは本当に癒され笑顔が溢れ、ほっこりして御祝儀も弾みます。

いつも帰路は心穏やかに、足取りも軽くてありがたき幸せとは、こう言う些細なものかも知れません。

前掛け作りを通じて多くを学ばせて頂き、「学ぶ」喜びの御加護で毎日が輝きます。

天満宮スカウト　活動日誌

◆ガールスカウト大阪府第八十一団

九月の防災月間から始まる下半期は、消火器の使い方や、ＡＥＤ・心臓マッサージの講習会からスタートしました。

芋掘りやハイキングは、スカウトの体力に合わせ部門ごとにおこないます。冬は室内で、空きビンを利用したクラフトや節分に向けた巻きずしの練習をしました。小さなスカウトも上手に出来、リーダー達はいつも驚きます。

体力をつけ、ルールを守ることを学びながら、三月は全員でボーリング大会を行いました。幼稚園児から大学生の若いリーダーまで大いに楽しみ、大人リーダーも大満足です。

年間を通し、小さなスカウトを年長のスカウトが上手に手助けをして、皆が安全に楽しく集会が出来ました。

◆ボーイスカウト大阪第九十八団

十二月に、団行事として当宮境内で餅つきを行いました。出来上がった鏡餅を神様へお供えした後、残りのお餅は参加したスカウトや、保護者・団委員など皆で堪能しました。

ボーイ隊は身につけた技能を活かし、かまどの火をつけ、ユース世代（十八～二十五歳）の若者達がぜんざいや豚汁を振る舞いました。

二月は、なみはや地区ＢＰ祭に参加しました。大阪城公園を会場に外国の方々と交流するプログラムやベーデン・パウエルについての○×クイズ等を行い知識を深めました。

三月に、わくわく自然体験を大阪天満宮境内で開催。地域の小学生低学年の子供達に、どんぐりを使ったクラフトや寝袋体験を通じてスカウト活動に興味を持ってもらうことができました。

四月に、入団上進式が行われ、新入団する子、上の隊に上進する子、新しい仲間と共に、スカウト技能の習得向上に努めていきたいと願っています。

境外の天満宮・天神祭（七）

綿業会館『蠟染 天満祭ノ図』

大阪市中央区備後町の綿業会館に掲げられている佐野猛夫『蠟染壁掛 大阪天満祭ノ図』を紹介します。

綿業会館は昭和六年（一九三一）、日本綿業倶楽部の建物として竣工し、翌年一月一日に開館。その豪華さ重厚さは昭和初期の名建築として高く評価され、平成十五年には本館が国の重要文化財の指定を受けています。

作者の佐野猛夫（一九一三～一九九五）は日本を代表するろうけつ染作家であり、京都市立美術工芸学校（現京都市立芸術大学）卒業の翌年となる昭和八年（一九三三）、本作品で第十四回帝国美術院展覧会（帝展）初入選を果たしました。

本作品は綿業会館の二階に展示されていますが、高さ二六一㎝×幅一七〇㎝の大作です。画面の中央には鳳神輿と玉神輿の二基が同舟し、人物の風俗は近世のであり、往時の古式ゆかしい船渡御が描かれます。背景の大阪城は本作品制作当時の復興再建（昭和六年）の姿かとも思われますが、それであればなおさら、綿業会館に本作品が掲げられるのは「大大阪時代」を偲ぶにふさわしいかもしれません。また見学に訪れる芸術大学生や留学生も作品の壮大さと格調、なにより染色の鮮やかさに感嘆されているとのことです。

綿業会館は大阪メトロ本町駅、堺筋本町駅から徒歩五分、会員制の倶楽部ですが一般見学会が毎月第四土曜日に開催されています。詳しくは日本綿業倶楽部様のホームページをご覧ください。

（広報企画室　仲真矢）

綿業会館本館

蠟染壁掛　大阪天満祭ノ図　　昭和８年　佐野猛夫作

広報室だより

新授与品『空を舞う狐絵馬』

近年、インバウンド観光が増える中で、外国人の御朱印希望が増えていることは、前号でご報告しました。

そこで、外国人参拝者に対してさらに日本の文化に触れて頂けないかを考え、『絵馬奉納』に焦点を当てました。勿論、日本人参詣者へも頒布しております。

『空を舞う狐絵馬』は、当宮末社である白米稲荷社の回廊に新たに絵馬掛けを設置し、稲荷信仰に伴う『家内安全・商売繁盛』を祈願いただけるようにしています。絵馬を奉納した際、稲荷大神の神使である狐が空を舞う様を構想して奉製致しました。

この『空を舞う狐絵馬』は、本年四月一日から当宮授与所で頒布しております（初穂料千円）。

白米稲荷社の祭礼

当宮境内の東北に末社の白米稲荷社が鎮座しています。毎年二月八日には田作り始めとして春祭を、四月一日・二日には初午祭として神楽や小鳥居奉納を受付けています。また、十一月八日には農事納めとして秋祭を斎行しています。

この社の創建年は不明ですが、江戸中期の享保十五年（一七三〇）九月に「稲荷社釿初め（ちょうなはじ）」を行い、翌年十一月に新しい社殿に「正遷宮」した記録があります。

初午祭については、享保二十年（一七三五）の二月五日が初見です。初午祭は、一般にはこの記録の通り二月に行いますが、現在の四月に変わった理由は定かでありませんが、この社を崇敬する福梅講が昭和二十六年ごろに結成され、このころから四月の初午祭が記録されています。

初午祭では、福梅講の講員にみくじ所の奉仕をいただいたり、稲荷寿司の接待をいただいたりしています。和やかな雰囲気でお神楽の剣舞が奉納演奏され、朱の小鳥居を奉献される方も多くおられます。余談ですが、稲荷寿司の発祥はここだという説もあるようです。

また社殿の回廊には、「狐の爪研ぎ石」が置かれており、古代に勾玉を研いだ石だと伝えられています。この石にちなんで「勾玉守」も授与しております。少し変わったところでは新たに「空を舞う狐絵馬」という絵馬も授与しています（10頁参照）。

巫女神楽舞

同社殿の東には稲荷奥宮があって朱鳥居が一列に並んでおり、ここで写真を撮る外国の方も多くなりました。境内には他にも摂社・末社がたくさんお祀りされていますので、順々にお参りしていただけたら、また知らない神様と出会えるかもしれませんね。

梅香学院のご案内

当宮境内の梅香学院では、和裁や茶道など、さまざまな教室が開かれています。「芸事の神様」でもある天神さんのお膝元ということで、沢山の生徒さんたちが、楽しく習い事をして下さっています。

梅香学院は、料理や、茶道・華道などの授業を通して作法を学ぶ、花嫁修業の女学院として昭和二十九年に創立しました。

現在は、着付け（火曜）、和裁（水曜）、書道（木曜）、茶道（木曜）の四科目の授業があります。各教科とも、講師の方の親切な指導のもと、近隣の方だけではなく大阪市内外の皆様も受講され、アットホームな環境でおおよそ毎週授業がおこなわれています。

着付けの授業では、自分で着物を着る練習の他に、人形を使って、人に着付けを行う技術も学ぶ事ができます。和裁の授業では、初心者が着物や衣類の縫い方を教わる中で、中級者、上級者は自分の好みの着物や衣類を作る事も可能です。また、書道・茶道を受講される生徒の方々も、講師の方の指導を受けながら、日々稽古に励まれております。

着付け、書道、茶道では、技能の上達次第では検定・免状などを取得する事も出来ます。

そんな生徒の方々が日々学んだ成果を発表する文化祭が毎年秋に行われています。今年は十月二十五日（土）・二十六日（日）の予定です。

梅香学院に興味がある方は、一度お問い合わせください（℡〇六・六三五二・六九〇九）。お申し込みをお待ちしております。

寺井種治宮司 大阪府神社庁庁長に就任

ご挨拶

宮司　寺井種治

本年三月二十八日付で大阪府神社庁庁長を拝命致しました。

神社庁とは、神社本庁の地方機関として各都道府県に設置されているもので、大阪府神社庁は宗教法人として府内の神社に関する事務をとる他、各神社の祭祀や活動の窓口となっています。

祖父の種長、父種伯に続き、庁長に就任する事となり大変光栄で、身の引き締まる思いであります。

これからは当宮の事のみならず、微力ながら斯界の発展の為に尽力して参る所存です。氏子崇敬者の皆様には御指導の程お願い申し上げます。

・・・・・・・・・・

右の通り、このたび、寺井宮司は大阪府神社庁の庁長に就任いたしました。宮司の父・種伯名誉宮司は七十一歳での庁長就任でしたから、今年六十一歳の種治宮司は随分早い就任となりました。

現在、神社本庁に加盟する大阪府下の神社は五百七十一社を数えます。今後の宮司は、大阪天満宮だけではなく、府下の数多くの諸社にも目配りしながら、神社界の興隆に向けて献身することが求められます。

折しも、当宮では二年後の令和九年に「菅原道真公御神退千百二十五年式年大祭」を迎えますので、その課題が山積しています。

これからは、当宮と大阪府神社庁（大阪市中央区久太郎町四丁目）を行き来しながら、重責を果たすことになりますが、皆様のご理解、ご助力を賜りますようお願い申し上げます。

人事任免

《新任》

総代　阪田　守司

総代　髙橋　知史

令和七年一月二十五日付

事務職　大嶋　麻耶（巫女より）

巫女　東野　佳歩

令和七年四月一日付

《転任》

権禰宜　園　博年

大阪　難波八阪神社へ

令和六年三月三十一日付

《退任》

巫女　森下　爽子

令和六年三月三十一日付

帰幽報告

総代　藤田　康夫

総代　井上　治之

令和七年一月

総代　栗原　敏純

令和七年四月

編集後記

ここ数年インバウンド（訪日外国人観光客）が急増していますが、開催中の「大阪・関西万博」によって今年はさらに増加が見込まれます。

昨年の都道府県別の統計では、東京都に次いで大阪府は二位の三三二万五千人の訪日を数えました。人気の観光地としては、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンや大阪城、道頓堀などが思い当たりますが、その一方、神社にも強い関心の目が向けられているようです。現に、当宮でも数多くのインバウンドを見かけるようになりました。

外国人には独特のミステリアスな魅力的な空間なのでしょう。そういえば、今年の当宮のカレンダーは「鳥居と門」がテーマですが、たまたまそれを目にした方が強く興味を示されましたので、差し上げた次第です。インバウンドには、鳥居も一つの観光資源となるようです。

大阪天満宮社報
てんまてんじん　第87号
令和7年5月20日印刷
令和7年5月25日発行
発行人　寺井 種治
発行所　大阪天満宮社務所
〒530-0041　大阪市北区天神橋2-1-8
TEL 06-6353-0025
印刷所　木村印刷株式会社